

小-20

脊柱管内において形質細胞腫瘍が発生した犬の1例

○吉田 慧¹⁾ 山口弘法²⁾ 華園 究³⁾ 小西郁男⁴⁾ 堀 あい¹⁾ 三好健二郎²⁾ 上野博史²⁾

- 1) 酪農大附属動物医療センター 2) 酪農大伴侶動物医療学 3) 酪農大生体機能学
4) パルク動物病院

【はじめに】形質細胞腫瘍はBリンパ球形質細胞系統細胞を由来とする腫瘍であり、多発性骨髄腫やIgMマクログロブリン血症、孤立性形質細胞腫などが含まれる。標的臓器として骨や皮膚、消化器、脾臓、肝臓、リンパ節などがあげられ、その他の部位での発生はまれである。今回、頸部脊柱管内硬膜外腔に腫瘍が形成され、後肢不全対麻痺を呈した犬の1例に遭遇し、いくつかの知見を得たため、その概要を報告する。

【症例】ミニチュア・ダックスフンド、雄、10歳齢、体重7.48 kg。階段より落下した後に後肢不全対麻痺および意識低下を認めた。近医にて脳炎を疑い、プレドニゾロン (Pre; 2 mg/kg) を用い治療したところ、良化を認めたが、数日後に再発を認めたため、本学動物医療センターへ紹介来院された (第1病日)。

【臨床経過】来院時の意識は傾眠状態であり、更に起立困難であった。血液生化学検査にて脾炎を疑う所見を認めたため、脾炎の治療を優先し、一般状態が改善した第14病日においてMRI検査を実施したところ、第6-7頸椎 (C6-7) レベルにおいて脊柱管腹側の硬膜外腔に左右対称性の造影増強のある腫瘍性病変を認め、腫瘍により脊髄が背方に圧迫を受けていた。続いて実施したCT検査において第5腰椎椎体の骨融解像を認めた一方、C6-7を含め頸椎には骨融解像を認めなかった。画像所見から腫瘍疾患が疑われたため、脊髄圧迫の減圧および生検を目的としてC6-7間において背側椎弓切除術 (Funkquist B型) を実施した。腫瘍は脊髄腹側に位置する両側の椎骨静脈洞を巻き込むように存在していた。部分切除した腫瘍を病理組織学的検査に供したところ形質細胞腫と診断された。第40病日よりメルファランおよびPreによる化学療法 (MP療法) を開始し、現在まで良好な経過を追っている。

【考察】本症例の形質細胞腫瘍は脊柱管内に発生した一方、腫瘍周囲椎骨にCT画像上骨破壊像を認めなかった。形質細胞腫瘍においてこのような発生様式はまれで、過去に報告のない様式であり、MP療法への反応が懸念されたが、現時点での反応は良好である。また、初診時に意識状態を傾眠と判断したが、頭蓋内に対する処置を行っていないにもかかわらず、脾炎治療後に意識状態が正常に改善したことから、脾炎による一般状態の低下を意識状態の低下と判断してしまったものと考えた。一症例の病態が複数の原因により引き起こされている可能性を考慮し、改めて様々な視点より病態の考察を行うことの重要性を認識した。